ISSN 2436-3782

ちひろ美術館・東京　No.215
安曇野ちひろ美術館　No.108
美術館だより

2022.5.23

ちひろ　雨の日　晴れの日

主催：ちひろ美術館

●2022年6月4日(土)～9月4日(日)

ちひろは、季節や時間帯によって多彩な表情を見せる光や空、濡れた色を映し出す雨の情景などを、みずみずしい感性で描きました。本展では、雨のなか傘をさして遊ぶ姿や、明るい日差しをあびて遊ぶ子どもを描いた作品などを、水彩の技法にも着目しながら紹介します。

雨ににじむ色

雨が降ると、見慣れた風景がいつもとは違った表情を見せます。街並みは雨の向こうに透け、地面は水鏡となって周囲の色を映し出します。「黄色い傘のふたり」（図１）の背景には、傘の黄色や長ぐつの紫、雨をイメージさせる水色などが、複雑ににじみあっています。使われている絵の具の色数は多くはありませんが、たっぷりと水を含ませ、紙の上でほかの色とにじませることで、透明感のある豊かな色のバリエーションを生み出しました。

図１　黄色い傘のふたり　1971年

図２　夏草のパーティー　1972年

光や風を描く

ちひろは、淡い色彩や紙の白を生かして、移ろう光を描きました。「夏草のパーティー」(図２)では、草のかすれたタッチや余白によって、また左側の少女の服を描かず紙の白地に消失させることで、まぶしい光の反射を表現しています。

ちひろが文も手がけた至光社の絵本では、主人公の心境と空模様を重ねたような表現がよく見られます。『ぽちのきたうみ』では、夏休みの旅先で愛犬の到着を待ちわびていた少女が、小犬とともに海辺を走るシーン（図３）が印象的です。少女のよろこびと呼応するように、夏の海と夕暮れの空が色鮮やかに描かれています。ちひろの絵からは、光や風、肌で感じる空気までもが伝わってくるようです。　（山田実穂）

図３　海辺を走る少女と小犬　『ぽちのきたうみ』（至光社）より　1973年

ちひろ美術館コレクション　絵本から飛び出せ！動物たち

主催：ちひろ美術館

●2022年6月4日(土)～9月4日(日)

地球上に生きるさまざまな動物たち。

森のなかひっそりと暮らすアナグマやイノシシ、アフリカのサバンナを闊歩するライオンやヌーの大きな群れ、一年中雪と氷に覆われた極地でたくましく生きるホッキョクグマ――。変化に富んだ複雑な生息環境や、人との関わりによって多様な種に分かれた動物たちは、それぞれがユニークな特徴を持っています。本展では、ちひろ美術館コレクションのなかから、世界の絵本画家が描いた動物たちを「森へ」「ジャングルの暮らし」「サバンナのなかま」「ちいさいがいっぱい」「人の一番近くで」「人の暮らしとともに」の６つのテーマに分けて紹介します。

森へ

ユーラシア大陸北部に広がる針葉樹林や温帯林には、キツネやシカ、ヒグマなど、広い地域で共通した動物が多く見られます。陸続きだった時代があるため、日本にもこうした共通種が存在します。

図１　エフゲーニー・ラチョフ（ロシア）『てぶくろ』（福音館書店）より　1950年

エフゲーニー・ラチョフが描いたウクライナ民話の絵本『てぶくろ』には、わたしたちにも馴染み深い動物が、洋服を着て登場します（図１）。ラチョフは民話に登場する動物を、人間の性格や社会的地位などを暗示し強調した存在であるととらえ、それを表現するために動物たちに民族衣裳を着せています。広大な針葉樹林とツンドラ（永久凍土に覆われた極寒の草原）が出会うロシアの美しい自然のなかで少年時代を過ごし、ウクライナの自然公園で野生動物の観察を続けたラチョフは、姿態の特徴をよくとらえたリアルな動物たちに人間の心を巧みに重ね合わせています。本展では、当館が収蔵する『てぶくろ』の原画全７点を、習作も含め展示します。

サバンナのなかま

アフリカ大陸中部に位置する、まばらに木の生えた熱帯の草原・サバンナでは、ヌーなどの大型草食動物が何千頭にもおよぶ大きな群れを成し、草を求めて移動しながら暮らしています。そして、こうした群れの存在が、ライオンを始めとする肉食動物のいのちを支えています。

図２　あべ弘士（日本）　『ライオンのながいいちにち』（佼成出版社）より　2003年頃

「生命はぐるぐるまわっている」――旭山動物園の飼育員という経歴を持つ画家・あべ弘士は、何度も訪れたアフリカの大地で壮大な生命の循環を感じたといいます。どこまでも続く青い空とサバンナ、そのなかで圧倒的な存在感を放つ動物を大胆な筆致と鮮やかな色彩で描いたあべの絵本『ライオンのながいいちにち』の原画を、一堂に展示します（図２）。

動物を見分けてみよう！

図３　ユゼフ・ヴィルコン（ポーランド）　ジャン・ギャバン　1991年

動物は、それぞれが持つ体の特徴から、「種」というグループに分けられます。同じサイでも、１本角のサイはアジアに、大きな２本角を持つサイはアフリカに生息し、５種が現存しています。それぞれ口元や皮膚に違いがあり、外見で見分けることができます。ユゼフ・ヴィルコンは、フランスの映画俳優ジャン・ギャバンをサイに見立てて描きました(図３)。洋服を着て、俳優の面差しを残したサイにも、ヴィルコンは動物本来の特徴を細かく描き込んでいます。動物写真と見比べながら、作品を観察するコーナーも設けます。

ときには写実的に、ときにはユーモラスに、さらにはイメージをふくらませて、画家が描いた動物からは、画面から飛び出してくるような、いきいきとしたいのちの輝きが感じられます。魅力あふれる動物たちをご覧ください。（宗像仁美）

ちひろ・花に映るもの

主催：ちひろ美術館

●2022年6月25日(土)～10月2日(日)

花と子どもの画家といわれるちひろの絵には、たくさんの花々が登場します。自宅の庭で草花を育て、アトリエに鉢植えを飾るなど、四季折々の花に囲まれた暮らしを楽しむなかで、花と語らい、花を慈しむ時間は、創作の源泉となりました。

1950年代から60年代半ばまでのちひろの絵には、前景に花を配した作品が多くあります。「ままごと」（図１）では、水彩の濃淡でカーネーションの幾重にも重なり合う花弁を表現しています。

図１　「ままごと」　1963年

1960年代半ばころから、より自由な発想で花を配した構図が登場します。「あやめと少女」（図２）では、少女のまわりに、装飾的にあやめの花の部分だけを描いています。みずみずしくしっとりとした質感のあやめは、少女の繊細な心情を想像させます。

図２　あやめと少女　1967年

ベトナム戦争が激化していた1970年代、ちひろは自らの戦争体験を重ね、反戦の思いを込めて、『戦火のなかの子どもたち』を制作しました。戦火にさらされるベトナムの子どもたちの姿を描き出したこの絵本の冒頭には、「そのすきとおった花びらのなかから　しんでいったその子たちの　ひとみがささやく」という詩とともに、子どもたちの顔が浮かぶシクラメンの花を描いています（図３）。シクラメンはちひろの冬のアトリエを飾る花でした。その花を見つめながら、いのちを落としていったベトナムの子どもたちを悼み、思いを寄せていたことがわかります。

図３　シクラメンの花のなかの子どもたち『戦火のなかの子どもたち』（岩崎書店）より　1973年

本展では、花の表現の変遷を追いながら、花に映るちひろの感性を探ります。

（宍倉惠美子）

ちひろ美術館コレクション　江戸からいまへ　日本の絵本展

主催：ちひろ美術館

●2022年6月25日(土)～10月2日(日)

江戸の草双紙

日本で広く絵本（絵入り本）が読まれるようになったのは、江戸時代のこと。限られた人しか手にできない手描きの写本が長く続いていましたが、江戸時代には木版の技術が進歩して版本が流通するようになり、浮世絵師たちの手がける「草双紙」が盛んに出版されました。

図１　赤本『さるかに合戦』　江戸時代中期（復刻版）

草双紙の先駆けとなったのは江戸時代中期に子どもへのお年玉として出版された「赤本」で、古くから語り継がれてきた昔話などが題材になりました。草双紙は時代が下るにつれて「黒本」や「青本」、戯作文学の舞台となった「黄表紙」へと、次第に大人向きのものに広がり、江戸後期には長編の「合巻」も出版されるようになりました。活字を用いずに、一枚の版木に絵と文字を彫る整版で印刷された草双紙は、絵と文字が一体となって物語を語り、大人も子どもも夢中にさせたといいます。

西欧文化と童画

長い鎖国から開国した日本では、260年あまり続いた江戸幕府が滅び、1868年、明治へと元号を改めます。新しい国家体制のもと、欧米を模範とした産業や教育、文化などの近代化が推し進められたこの時代には、西欧美術とともに、当時イギリスを中心に花開いた絵本の文化ももたらされました。また雑誌が新メディアとして普及するなか、子ども向けの雑誌も出版されるようになりました。なかでも1922年に創刊された絵雑誌「コドモノクニ」では岡本帰一や清水良雄、武井武雄、初山滋ら個性豊かな画家たちが活躍しました。純粋な童心の世界を描いた彼らの「童画」は、当時の子どもたちの憧れでした。

図２　清水良雄　おふね　児童雑誌「赤い鳥」創刊号（赤い鳥社）　1918年

図３　初山滋　『コドモエホンブンコ　一寸法師』（誠文堂）より　1928年

しかし1937年に日中戦争が開戦して戦時統制が強まると、子どもの本も次第に戦時色を帯び、戦意高揚に利用されていきました。太平洋戦争に突入してからは、物資も欠乏し、多くのいのちが奪われて、子どもの本の文化も潰えていきました。

戦後から現代の絵本

敗戦によってＧＨＱの占領下におかれた日本では、アメリカの高い水準の絵本が紹介されるようになりました。そうした絵本に影響を受けて、「岩波の子どもの本」や月刊絵本「こどものとも」など、ひとつの物語をひとりの画家が描くスタイルの絵本づくりへの模索が始まりました。

1960年代になると絵本を手がける出版社が増え、『いないいないばあ』や『スーホの白い馬』など、半世紀余りを経た今も読み継がれるロングセラーが誕生します。絵本は画家たちの新たな表現形式として注目され、絵も文も手がける絵本作家も登場するようになりました。今や、絵本の対象はあかちゃんから大人にまで広がり、その題材はあらゆるジャンルにわたっています。

江戸時代からのおよそ400年の間に、印刷や本の形、絵画や文学、子どものとらえ方などさまざまな要素が絡み合いながら絵本は変化してきました。繰り返し絵本の題材となってきた昔話をみても、時代によって物語の解釈は変わり、新しい絵本が生まれています。ちひろ美術館のコレクションで紹介する江戸時代から現代までの絵本の歩みと広がりをご覧ください。

（上島史子）

図４　西村繁男『がたごとがたごと』（童心社）より　1999年

いわさきちひろ展　中谷泰を師として

主催：三重県立美術館、ちひろ美術館、中日新聞社
助成：公益財団法人岡田文化財団、公益財団法人三重県立美術館協力会

●2022年7月16日(土)～8月28日(日)　三重県立美術館(三重県津市)

三重県立美術館（三重県津市）で、いわさきちひろと、中谷泰（なかたにたい）をテーマにした展覧会が開催されます。洋画家の中谷泰(1909–1993)は三重県松阪市出身で東京を拠点に活動しました。洋画団体「春陽会」へ出品するほか、1938年に文展に初入選し、1939年と1942年には特選を受賞して、新進画家として注目されます。このころ、ちひろは中谷の作品に感化され、自ら志願して弟子入りし、１年以上にわたり油絵の指導を受けました。当時、中谷がちひろをモデルにして描いたとされる油彩も残されています(図)。その後、戦争が激しくなり、東京の空襲で家を焼かれたちひろは、長野県松本市に疎開し、そこで終戦を迎えます。終戦から約２ヵ月後、ちひろは松本から、東京にいる中谷に宛てた手紙に次のように記しています。「都会も良いのですが、たまに上京し展覧会や映画等見て描いた絵を直して頂く位にしておいてあとは信州に暮したいような気がします。」しかし、自身の生き方を見つめ直したちひろは1946年の春、27歳のときに単身で上京し、新聞記者の仕事をしながら画家になる道を模索します。画家の丸木位里・赤松俊子(後の丸木俊)夫妻が主宰するデッサン会に参加するなど、貪欲に絵の研鑽に励みます。中谷とも東京で再会を果たし、同じ美術団体にも所属し、展覧会に出す作品の助言も受けていたようです。戦中から戦後にかけて、ちひろが画家になる過程を見守った唯一の画家が中谷でした。

中谷泰 婦人像 1942年

1950年代の半ばから、ちひろは、子どもの本の仕事を増やし、やがて童画家と呼ばれ、1960年代の半ばからは絵本画家として活躍しました。一方、中谷は炭鉱や陶土採掘場などの風景作品を描き、そこで働き、そこに生きる人々を見つめ、独自の詩情をたたえた具象画を残しています。ちひろと中谷は、活躍した舞台は異なりますが、対象に向けられたあたたかいまなざしに共通するところがあります。互いの活動を尊重していたふたりの交流は、ちひろが亡くなるまで続きました。本展では、ふたりの交流を軸に、今まで知られてこなかった側面にも光を当てます。　（原島恵）

いわさきちひろ　と　奥村まこと・生活と仕事

主催：公益財団法人　ギャラリーエークワッド、ちひろ美術館
協力：村上藍(奥村まこと研究者／『奥村まことの生涯とその設計』著者)、黒姫童話館

●2022年6月3日(金)～9月8日(木)　ギャラリーエークワッド(東京都江東区)

いわさきちひろは、長野県北部の黒姫高原に、赤羽末吉やいぬいとみこなど、児童文化関係者らとともに、1965年に土地を購入し、翌年に女性建築家の奥村まことの設計により、自宅のほかでは初めてのアトリエとなる黒姫山荘を建てました。ちひろとまことは、ともに働く自立した女性であり、一児の母でもあり、それぞれ強い個性をもちながらも、意気投合します。協議を重ねて完成したアトリエをちひろは愛し、東京の喧噪を離れた自然豊かなこの場で『花の童話集』や『あかまんまとうげ』などの作品を描きました。童心社の編集者だった佐伯靖子は、ちひろが「この家を設計してくださったのは女の方なの。だから、台所もとっても使いやすくできているのよ」と語ったと記しています。

ちひろより12歳年下のまことは、現在の東京都練馬区に生まれ、自由学園で学んだ後、女性としては初めて東京藝術大学の建築科に入学します。その後、恩師の吉村順三の設計事務所に入社すると、持ち前の積極的な性格を発揮して、所員の給料の値上げや、残業代の支払いを交渉しました。大学の２年先輩の奥村昭雄と結婚したときには、夫婦間の取り決めを記した「憲法ノート」を作成し、支え合いながら住宅を中心に多くの設計を手がけます。仕事で多忙を極めるなかでも料理の実験をしたり、身の回りのことを記録したりしていました。まことは、2016年に85歳で亡くなるまでその人柄で多くの人を魅了しました。

本展では、女性が自分の意志で仕事をもち、活躍することが困難だった時代、草分け的存在ともいえる絵本画家のちひろと、建築家のまこと、ふたりの女性に注目します。ふたりの接点である黒姫山荘のアトリエを中心として、それぞれの人生や暮らしを、作品、資料、写真やことばで紹介します。

（松方路子）

奥村まことが設計したちひろの黒姫山荘外観

窓

私たちは、「平和」を繕いつづける

竹迫祐子（公財）いわさきちひろ記念事業団

「自分に都合の良い思考、内部の異論を排除し外部の批判を受け付けない態度、過度のナショナリズム、敵の動機や能力を過小評価する上層部の傲慢」に「文化的・人種的偏見がつきまとう」という点が共通する「戦争の文化」。そう語るのは、日本近代史、日米関係史学者のジョン・W・ダワー。真珠湾攻撃、広島・長崎への原爆投下、9.11、イラク戦争に関する記録や文献を調べ、「戦争」というものの本質を分析しています＊1。

2022年２月24日、ロシアは（突然）ウクライナに軍事侵攻しました。ロシアは、この侵攻をウクライナ東部のロシア系住民を守るための「自衛」という名目ではじめ、日々、ウクライナ各地で民間人を含む数多くの悲惨な犠牲者を出し続け、多くの難民を生んでいます。

一方のウクライナは、「母国を守る」ために応戦。大統領自らＳＮＳなどで世界にその惨状を伝え、ウクライナへの支援、とりわけ武器支援を繰り返し訴え続けています。世界中からのさまざまな人道的支援とともに、アメリカなどＮＡＴＯ(北大西洋条約機構)の国々からは、多くの攻撃的軍事兵器がウクライナに送られています。

核兵器の使用を含め、いつ、最悪の事態が起こっても不思議ではないように思われるこの戦争は、必ずしも突然起きたものではありませんでした。冷戦終結後、世界のパワーバランスが微妙に変化するなかで、2008年にアメリカがウクライナとジョージアのＮＡＴＯ加盟を主張し、以来、ＮＡＴＯの東方拡大の懸念は、ロシアを追い込み、ジョージアへの武力行使、クリミア半島併合へと向かわせました。

この間、私たちにできることはなかったのか？と自問する日々に、高畑勲さんが紹介した＊2ジャック・プレヴェール＊3の「君が戦争を欲しないならば、繕え、平和を」ということばを思い起します。戦争を繰り返さないために、私たちには不断の努力が必要だということを……。

今、戦争への危機感が高まるなかで、「全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する権利を有する」と謳う日本国憲法を改悪し、軍備を拡大、非現実的な「核共有」まで口にされています。戦争は一度（ひとたび）始めれば、最後まで行くしかない。だから、私たちは戦争を回避する努力を怠るわけにはいきません。

＊１『戦争の文化　パールハーバー・ヒロシマ・9.11・イラク』(ジョン・W・ダワー：著　岩波書店)　＊２『君が戦争を欲しないならば』(高畑勲：著　岩波ブックレットNo942)
＊３フランスの民衆詩人、ジャンソンの「枯葉」の作詞、映画「天井桟敷の人々」の脚本を行った。

東京美術館日記

平和を願うステッカー

3月12日（土）☀
２カ月の冬期休館を経て、「幼い日に見た夢　いわさきちひろ展」「エリック・カールとアメリカの絵本画家たち」初日。ちひろ自身の幼少期を思い起こさせる作品が並ぶ１階。２階ではカールのあざやかな色彩が出迎えてくれる。乳幼児など小さな子ども連れのご家族の姿が多く、ほほえましい。

4月1日（金）☁
ちひろ美術館公式サイト内「願いを伝える活動」ページでは、平和を願うステッカーをダウンロードできるよう、常時公開している。ちひろの絵に平和への思いを託し、未来に生きる子どもたちの幸せを考えるきっかけとなることを願う。ロシアのウクライナへの軍事侵攻開始から１カ月余り。東京館でも、本日より「キエフ　老人たち」１点を図書室に展示する（安曇野館「日記」欄参照）。

4月23日（土）☁
講演会「ちひろ美術館とエリック・カール」（講師：松本猛）を開催。カールのアトリエや制作のようすなど、親交を深めた松本ならではの写真や資料が紹介され、「美術館を始めたきっかけやカール氏の人柄などを知ることができて大変有意義でした」「エピソードをたくさんうかがえ、感動しました。人生が変わるくらいの素敵な日になりました」などの感想が寄せられた。

4月30日（土）☀
昨年、一昨年もこの時期に臨時休館していた東京館では、ゴールデンウィークの開館は三年ぶり。新緑に囲まれて遊ぶ子どもたちの姿に、スタッフも明るい気持ちになる。１か月前には、区内在住の方が、遠方から上京するご家族のために事前の道順確認にいらしたことも。感染症対策を継続しながらも以前のように来館される方が増えてきたことがうれしい。

5月6日（金）☀
園芸スタッフが丹精している庭は「花の色合いもよく、素敵ですね」とお褒めのことばをいただくこともあるが、夏にかけて繁茂する植物の勢いに手入れが追いつかないのが悩みの種。そこで、園芸に興味がある支援会員の方に呼びかけ、ボランティア活動を開始。

安曇野美術館日記

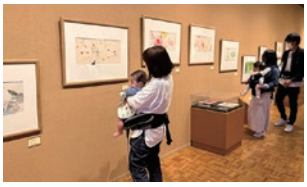
いわさきちひろ「キエフ　老人たち」1963年

2月21日（月）☁
３月１日からの開館に向けて、春の展覧会の飾りつけ作業を行う。休館中の静寂な空間に作品が並び始めると、いのちが吹きこまれ、展示室がぱっと明るくなった。

3月27日（日）☁のち☀
春の訪れを告げる「まつかわ花咲きまつり」が安曇野ちひろ公園で開催される。パンジーやビオラでちひろの作品「ひまわりとあかちゃん」を表現した地上絵が登場し、トットちゃん広場が花々の甘い香りに包まれた。パンジーの即売会には、地元のみなさんが長い列をつくりにぎわった。

3月29日（火）☁
ロシアのウクライナへの軍事侵攻が始まって１ヵ月余り。子どもを含む多くの市民が戦火にさらされている。急遽、展示室２に、1963年にちひろが旧ソビエトを旅した際に描いたスケッチから２点を選び、展示することに。ちひろがキーウの街並みとそこに暮らす人々の姿をとらえた作品を前に、熱心に語り合うお客さまの姿が見られる。「世界中のこどもみんなに平和としあわせを」というちひろの願いを展示や活動を通して伝え、発信を続けていくことは当館の使命のひとつだと強く感じる。

4月2日（土）☀
「あかちゃんとおでかけしよう！ファーストミュージアムデー」を開催。９組24人の親子が展示室での作品鑑賞や絵本の読み聞かせを楽しんだ。目を輝かせながら作品を指さすあかちゃんとそんな我が子にやさしく微笑みかけるお母さんの姿はまるでちひろの絵のよう。



4月29日（金・祝）☀
まん延防止等重点措置が解除されてから初めてむかえる大型連休の今日。あいにくの雨模様にもかかわらず、全国から多くのお客様が来館された。親子三世代で仲良く楽しそうに過ごされている家族連れの姿が目立つ。館内には、子どもたちの元気な声が響き、久しぶりに活気が戻った。

ひとことふたことみこと

東京館　**1月14日（金）**
ベトナム戦争で亡くなった子どもの顔が、シクラメンの花びらに浮かぶ絵を見て心を打たれました。こんなに静かに強く戦争反対を訴えかけてくる絵は初めてです。

3月24日（木）
11ヵ月の娘のファーストミュージアム。毎日胸が締めつけられるほど悲しい戦争のニュースが続くけれど、世の中にはこんなにもやさしい色とやさしい絵があるんだよ、と伝えてあげたいです。　H.L

3月27日（日）
アトリエが大好きです。ちひろさんの心に触れられる気持ちになります。写真を見て、そっと心で話しかけて帰ります。　けいこ

5月7日（土）
ちひろの生家のある福井県から来ました。反抗期だった娘と数年前に生家へ行き、ちひろの作品を見ながらいろいろな話をしました。その娘もかわいい女の子のママに。いつか三人で生家、東京、安曇野にも訪れてみたいです。
初美

安曇野館　**3月6日（日）**
せっかくのお休みなのに、美じゅつ館に行くって言われて嫌だった。お家でゲームしたり、遊園ちに連れてってほしかった。でも、きてみたらたくさんの絵があった。つまらないはずなのに、あっという間に時間になっちゃった。
りょうすけ

3月22日（火）
最初「やまのディスコ」のイメージを見た時、驚きました。絵がとびでているように見え、とても自分では発想ができない作品でした。たくさんのジャンル、種類の絵があり、どれも目に留まる作品で感動しました。全作品すばらしかったです！　りほ　15歳

4月4日（月）
この絵本の部屋が大好きです。絵本は芸術品だと強く感じます。子どもたち、孫たち、感性の豊かな世代の人々はもちろん、世間の荒波にもまれて日々生き抜く大人にとっても、これからもずっとずっと絵本はともにある存在だと思います。　Akiko.S

INFORMATION

〈ちひろ美術館・東京　次回展示予定〉

●10月8日(土)～2023年1月15日(日)

くらし、えがく。
ちひろのアトリエ

いわさきちひろ　アトリエの自画像
『わたしのえほん』（新日本出版社）より1968年

〈安曇野ちひろ美術館　次回展示予定〉

●9月10日(土)～11月29日(火)

ちひろからの定期便
「子どものしあわせ」と「こどものせかい」

谷内こうた展　風のゆくえ

ちひろ美術館コレクション
絵本画家の絵の具箱

谷内こうた『なつのあさ』（至光社）より1969年

ちひろ美術館(東京・安曇野)　イベント予定

各イベントの予約・お問い合わせは、各館へ。ちひろ美術館・東京 TEL.03-3995-0612　安曇野ちひろ美術館 TEL.0261-62-0772
下記のイベントおよび展覧会の会期は予告なく変更になる可能性がございます。最新情報につきましては、公式サイトをご覧いただくか、お電話にてお問い合わせください。　chihiro.jp

【ちひろ美術館・東京で開催のイベント】

〈ちひろ美術館コレクション　江戸からいまへ　日本の絵本　関連イベント〉

●西村繁男講演会(オンライン)「日本の歴史を絵本に描く」

○日時：７月24日（日）14：00～15：30
○講師：西村繁男（絵本画家）
○参加費：700円　○定員：70名（先着順）
○申し込み：要事前予約
（Peatix にて６月24日（金）10時より受付開始）
※詳細は美術館公式サイトをご覧ください。

江戸をはじめ、古代から現代にいたるまでのさまざまな人々を、絵本に描いている西村繁男さん。写真もなかった時代の人の姿や風景を、どのように絵にしているのでしょうか。ご自身の絵本づくりについてお聞きします。

〈ちひろ・花に映るもの　関連イベント〉

●松本猛　ギャラリートーク

○日時：７月31日（日）14：00～14：30
○講師：松本猛（ちひろ美術館常任顧問）
○参加費：無料（入館料別）　○定員：15名　○申し込み：当日受付

いわさきちひろのひとり息子・松本猛によるギャラリートーク。展示作品を見ながら、母・ちひろとの思い出や展示のみどころなどをお話します。

●わらべうたあそび(オンライン)

○日時：９月３日（土）
○講師：服部雅子（西東京市もぐらの会代表・はとさん文庫主宰）
○対象：10：30～11：00　０～１歳６ヵ月児と保護者
11：30～12：00　１歳７ヵ月～２歳11ヵ月児と保護者
○参加費：無料　○定員：各回５組
○申し込み：要事前予約（美術館公式サイト、TEL.03-3995-0612にて８月３日（水）より受付開始）

リズムにあわせて体を動かしたり、声を出して歌ったり。物語への入口となる「わらべうた」を親子で楽しみましょう。

●ギャラリートーク

第１・第３土曜日14：00～14：30
○定員：15名
○申し込み：当日受付

●絵本のじかん

第２・第４土曜日11：00～
○定員：15名
○申し込み：当日受付

【安曇野ちひろ美術館で開催のイベント】

〈ちひろ　雨の日　晴れの日　関連イベント〉

●ちひろの水彩技法体験「空を描こう」

○日時：７月３日（日）14：00～15：00
○会場：安曇野ちひろ美術館　多目的ギャラリー
○参加費：300円（入館料別）　○定員：16名
○申し込み：要事前予約（美術館公式サイト、TEL.0261-62-0772にて）

いわさきちひろが得意とした水彩絵の具の“にじみ”や“白抜き”“渇筆”の技法を体験しながら、思い思いに、空を描きましょう！
展示担当学芸員による作品解説もお楽しみください。

〈ちひろ美術館コレクション　絵本から飛び出せ！動物たち　関連イベント〉

●動物園の飼育員さんに聞いてみよう！絵本の動物たちのリアル

○日時：６月19日（日）14：00～15：00
○会場：安曇野ちひろ美術館 多目的ギャラリー
○講師：高田孝慈（長野市城山動物園）
○参加費：無料（入館料別）　○定員：30名
○申し込み：要事前予約（美術館公式サイト、TEL.0261-62-0772にて）

動物と一番身近に接している飼育員さんから、動物園の仕事についてのお話や、作品に登場する動物たちのリアルな素顔を教えてもらいます。

●学芸員によるスライドトーク

第４土曜日 14：00～ちひろ展
14：30～コレクション展
○定員：20名
○申し込み：不要（参加自由）

●絵本のじかん

第２・第４土曜日 11:30～12:00
○定員：20名
○申し込み：不要（参加自由）

【安曇野ちひろ公園でのイベント】

●おでかけホリデー

５月～10月の毎月第４土曜日に開催。
調理体験や火おこし体験、野菜の収穫におさんぽ会やマルシェなど、楽しいイベントが盛りだくさんです。

●夏のイベント

○７月23日（土）トットちゃんの夏祭り
○８月20日（土）トットちゃんの肝だめし
※最新情報は、安曇野ちひろ公園公式サイト（chihiro-park.org）をご覧ください。

CONTENTS

〈安曇野ちひろ美術館〉ちひろ　雨の日　晴れの日／ちひろ美術館コレクション　絵本から飛び出せ！動物たち…❷／〈ちひろ美術館・東京〉ちひろ・花に映るもの／ちひろ美術館コレクション　江戸からいまへ　日本の絵本展…❸／〈館外展紹介〉三重県立美術館・いわさきちひろ展　中谷泰を師として／ギャラリーエークワッド・いわさきちひろ と 奥村まこと・生活と仕事／窓…❹／東京・安曇野美術館日記／東京・安曇野ひとことふたことみこと…❺

美術館だより　合併号　No.215/108　発行2022年5月23日

ちひろ美術館・東京
〒177-0042　東京都練馬区下石神井4-7-2　TEL.03-3995-0612

安曇野ちひろ美術館
〒399-8501　長野県北安曇郡松川村西原3358-24　TEL.0261-62-0772